

卒業研究

「なぜハドソン・テイラーは神様に用いられたのか」

指導教員

齋藤 五十三先生

2020 年 1月 17 日提出

東京基督教大学

神学部神学科 神学専攻

学籍番号 U16106

中島豊

序論

私たちの王であるイエス様は、「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」¹と命じられた。したがって私たちには、全ての造られた者に福音を伝える使命が委ねられている。筆者が心から願い、神様に祈り求めていることは、全世界の全ての人々が救われて真理を知ることである。そのために、より多くの人に福音を伝え、どうすれば多くの人々をキリストに導くことができるのか、ということに大きな関心がある。神様から、全ての造られた者に伝えなさいと命じられているならば、私たちはその命令に従う必要がある。しかし、全ての人に伝えるとは途方もなく大きな使命である。世界人口は2019年現在で約75億人とされており、世界人口の3分の1がキリスト教徒とされている。²しかしながら、残りの3分の2の人々に当たる約50億人の人々に福音が必要であり、その全ての人に福音を宣べ伝える必要がある。どのようにすれば、約50億人の人々に福音を伝えることができるのだろうか。この論文では、今までの歴史上で神に用いられた人物の生涯を研究することにより多くの教訓や秘訣を学ぶことができるのではないかと思い、中国宣教に多大な影響を与えた宣教団体の創設者であるハドソン・テイラーの生涯に着目し、研究を進めていく。神はハドソン・テイラーを用いて約10万人の人々をキリストに導かれたのであるが、その背後には、神の恵みに祈りによってより頼む彼の生き方があった。また、聖霊の導きに対して、従順に応答し、聖霊様との親しい交わりの中で、みことばに人生を懸けていく日々の地道な歩みがあった。

ハドソン・テイラーが神に用いられた事実を、ハドソン・テイラーの息子、ハワード・テイラーは次のように書き記している。

¹ マルコ 16:15

² 遠藤周作監修、佐藤陽二編「世界のキリスト教会の現状」三省堂、キリスト教ハンドブック改訂版、https://www.sanseido-publ.co.jp/publ/jesus_hdb_2/html/chapter_five_2.html 2020.1.2

受洗した者の数は、一万三千人である。今日、三千ないし四千の中国の働き人が、C・I・M(チャイナ・イングランド・ミッション³)と関係を持ち、1900年以降の受洗者だけでも十万に及んでいる。「主よ、われらにではなく、われらにではなく、(中略)ただみ名にのみ栄光を帰してください」。⁴

ハドソン・テイラーを通して神様により設立された宣教団体(チャイナ・イングランド・ミッション)から1,200人以上⁵の宣教師が遣わされ、受洗者は10万人以上与えられている。なぜハドソン・テイラーはこれほどまでに神様に用いられたのだろうか。

問題の所在

筆者は、ハドソン・テイラーは神に用いられた、と記している書物を読んだが、なぜ、ハドソン・テイラーが神様に用いられたのかという理由を記している書物は皆無であった。⁶そこでこの研究では、なぜ彼が用いられたのかという共通理解が乏しいことを問題として取り上げる。

ハドソン・テイラーを通して神様は多くの人々の救いのみわぎを行われたが、筆者は、聖霊の働きと聖霊の働きかけに答えていく彼の生き方に、彼が用いられた原因があるのではな

³ チャイナ・イングランド・ミッションの働きは1951年以降働きを続けることができなくなり、現在はオーバーシーズ・ミッションナリー・フェローシップという名前で、日本をはじめ、東南アジアの各地でその働きを続けている。日本での名前は、国際福音宣教会であり、OMFインタナショナルという超教派のプロテスタントの宣教団体である。

⁴ ハワード・テイラー、舟喜信訳『ハドソン・テイラーの生涯とその秘訣』いのちのことば社、256頁

⁵ 同上

⁶ 筆者は以下の9冊の本を読んだが、ハドソン・テイラーが神に用いられた理由を記している物は皆無であった。(聖書図書刊行会編集部、『ハドソン・テイラーの伝記』、證道出版社、1956年、
ハワード・テイラー著『ハドソン・テイラーの生涯と秘訣』舟喜信訳、いのちのことば社、1964年、ハドソン・テイラー著『ハドソン・テイラー、信仰の生涯を語る』いのちのことば社、1991年、
ハドソン・テイラー、岡藤訳『回想』三一書店、1955年、八木哲郎著『19世紀の聖人ハドソン・テイラーとその時代』キリスト新聞社、2015年、胡宣明編『ハドソン・テイラーの伝記』ジャパン・コンサイアバティブ・バプテスト・ミッション、1956年、ロジャー・スティーア著『ハドソン・テイラー、キリストに生きた人』栗原督枝訳、いのちのことば社、2000年、石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷暁介・渡辺裕子、『はじめての中国キリスト教史』、かんよう出版、2016年、グスター・コル『支那西教史考』房書堂山向、1926年

いだろうかと考察している。聖書の中の使徒の働きには、弟子たちを通して働かれた聖霊の働きが多く記されているが、同様に、ハドソン・テイラーの人生にも聖霊の働きが顕著であるからである。これは筆者の仮説ではあるが、神様に用いられる秘訣は、聖霊の働きにかかっており、ハドソン・テイラーの生き方に大きく関連しているのではないだろうか。聖霊の働きについて、使徒の働きには次のように紹介されている。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。⁷」イエス様は、聖霊が臨むときに力を受け、エルサレム、ユダヤとサマリヤ全土、地の果てにまでイエス様の証人となる事を語られた。この箇所から、聖霊の働きが、力を受け、イエス様の証人として神に用いられる鍵であると読み取ることができる。この仮説を立証するために、彼の生涯の中で顕著に見られる特徴を、分析していく。

研究方法

研究方法として、ハドソン・テイラー自身が書き記した自伝、また彼の息子であるハワード・テイラー、そして他の著者の記した伝記をもとに、ハドソン・テイラーの人生を考察する。また、本研究においては、彼の人生に働かれた聖霊の働きに焦点を置き、以下の角度から彼の人生を考察する。まず第1に、どのような聖霊の働きかけがあったのか、第2にその働きかけにどのように彼が応答したのか。そして第3に、彼の応答に対して神様がどのように働かれたのか、という3点に着目し、彼が神様に用いられた理由をこの卒業研究で明らかにする。筆者の祈りは、この論文を読まれる全ての方が、全ての人が救われるという神様の御心を行うために大いに用いられることである。そのために、ハドソン・テイラーの生涯を通じて福音を多くの人々に宣べ伝える秘訣を学び、ハドソン・テイラーではなく、主の御名に栄光を帰す事を求めて、彼の人生に働かれた神のみわざに迫り、本研究を進める。

第1章 ハドソン・テイラーの生涯

ハドソン・テイラー（以下、テイラー）はどのような生涯を送ったのであろうか。第一章では、テイラーの生涯を紹介する。第一に、どのような家庭環境で育ったのか。第二に、どのようにキリストを受け入れたのか、第三にどのように中国宣教の志を与えられたのかを紹介する。

⁷ 使徒の働き 1:8

第1節 どのような家庭環境で育ったのか

テイラーは、1832年5月21日に、イギリス中部にあるヨークシャー州バーンズリー村で、ジョンとアメリカの間に産まれた長男であった。⁸テイラーの父であるジョンは、若い時からアメリカと出会い結婚し、商売に励み、日曜日ごとに近くの村にいる福音を聞いたことのない人々を訪ね、みことばを分かち合っていた。テイラーの父、ジョンが19歳の時にはその地方の伝道者の名簿に名が記されていた。ジョンは、テイラーが生まれる前に以下のみことばをアメリカに分かち合い、これから生まれる赤ちゃんについて語り合い、祈ったことが次のように記されている。

ある日、彼は聖書を手に取り、日ごろ肝に銘じている二、三節について彼女に語ろうと思って、あちこちをめくってみて、出エジプト記十三章と民数記第三章から数節を選び出した。「…初めに胎を開いたものを、…みな、わたしのために聖別しなければならない。…」(出エジプト記十三・二)「ういごはすべて、わたしのものだからである。…」(民数記三・十三)「主にささげなければならない。…」(出エジプト十三・十二)二人はこれからさきの幸福について長い時間熱心に語り合った。(中略)彼らの子は、主の子であるから、彼ら自身のもの以上のものであった。(中略)後年になってこの母はこう書き記している。「わたしたちは跪いて、この子をおごそかに捧げ、わたしたちの初子はその時から本当に神へ聖別されるように、聖霊の豊かな力添えを願ったのです。⁹

テイラーの父であるジョンは妻アメリカに対して、長子はすべて神のものであるというみことばを開き分かち合い、夫婦で神のものである初子を神に捧げる祈りを捧げたのであった。このような両親の祈りの中でテイラーは誕生したのである。またテイラーの祖父であるジェームズは、結婚式の当日にキリストを主として受け入れ、暇があれば必ず野外で福音を説きすすめる勇敢なキリストの戦士であった。¹⁰あるときはガラスの粉を混ぜた泥の塊を彼の顔にべったりとつけて、ゴリゴリすり回し、目の中に刷り込んで擦り込み彼を盲目にしようとする者がいた。それを見ていた主人が彼らを訴えるようにといたが、その時にテイラーがどのように迫害する者に対して対応したかが次のように記されている。「テーラーは首を横

⁸ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、14頁参照

⁹ 同上書、13、14頁

¹⁰ 同上書、4頁参照

に振って、『いいえ、そんなことはしません。主は彼らを改心させることができるはずですから』とって、承知しなかった。¹¹」

ハドソン・テイラーの祖父は迫害されても、抵抗せず主に信頼し、「福音を宣べ伝えなさい」というみことばを喜んで実践していたのである。聖書の中の詩篇には、主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ者の子孫が勇士となることが約束されている。「ハレルヤ。幸なことよ。主を恐れ その仰せを大いに喜ぶ人は。その子孫は地の上で勇士となり、直ぐな人たちの世代は祝福される。」¹²

このような、伝道に熱心な父と祖父の元に、ハドソン・テイラーは3代目クリスチャンの長男として生まれた。彼は、両親の祈りの中で主に捧げられ、主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ祖父の子孫として、神の国の勇士として召され、この世に誕生したのであった。

第2節 どのようにキリストを受け入れたのか

テイラーは、信仰深い両親に祈られる中、成長していった。彼がイエス様を受け入れたのは、あるトラクトを見たのがきっかけだった。その日の出来事についてテイラー自身は次のように振り返っている。

忘れもしない私が15歳頃のある日のことである。ちょうどその時母は旅行中で、私も休暇中であった。そこでなにか退屈しのぎに読むものはないだろうか、父の書齋を探しまわった。別にこれというものがなかったので、私はパンフレットに入っている小さなカゴをかきまわし、その中から福音トラクトを一冊選び出した。(中略) ちょうどその時私の母は百二十キロほど離れたところにいたが、彼女の心に何が起ころうとしていたのか、私はもちろん知るよしもなかった。彼女は昼食を終えて席を立った。その時、彼女の心が、息子の回心を求める切なる願いでいっぱいになった。そして、このように家を離れ、普通には得られない時間を与えられているのも、息子のために特に祈る機会を与えられているのだと感じた。彼女は部屋に入って、戸に鍵をかけ、祈りが答えられるまでその場を去るまいと決意した。何時間も何時間も母は息子のために祈った。そしてついに祈れなくなってしまった。今はただ、「すでに成就した」と神の御霊が彼女に告げられた事、すなわちその一人息子の回心について、神を賛美するばかりであった。

13

¹¹ 同上書 4, 5頁

¹² 詩篇 112:1,2

¹³ ハドソン・テイラー、いのちのことば社出版部訳『信仰の生涯を語る』いのちのことば社、1991年、10.11頁

テイラーが父の書齋で福音のトラクトを見ている時、聖霊はテイラーの母アメリカに働きかけ、テイラーの回心への願いが溢れ、神に祈るように導かれた。テイラーの母アメリカはテイラーの回心のために何時間も祈り、聖霊によって、祈りが聞かれた確信を得て賛美するように導かれたのであった。聖霊に導かれ、その祈りの後で、ハドソンに聖霊はどのように働かれたのであろうか。ハドソンは次のように記している。

一方私は、前にも言ったとおり、導かれるままにパンフレットを取り上げた。それを読んでいる間に「キリストが成就してくださったみわざ」という言葉に心を引かれた。

(中略)『罪に対する完全無欠の贖いと義の満足、すなわち神に対する負債はキリストによってすっかり支払われたのだ。キリストは私たちの罪のために死んでくださった。いや私たちのためばかりではない、全世界の罪のためにも死んでくださったのだ。』するとまた次の疑問が浮かんできた。「全てのわがが完成し、すべての負債が支払われたのならば、残された私たちの働きはなんだろうか。」これは同時に喜ぶべき確信のぎざしであった。聖霊がまるで、魂の中に差し込んできた光のようであった。「この世にはもう、なすべきものは何もないのだ。ただひざまずいてこの救い主とその救いを受け入れ、彼を永遠に賛美するだけだ。」このようにして私の愛する母は母で、その部屋の中でひざまずいて神を賛美していた時、私は私で、ひまつぶしにパンフレットを読むため、ただ一人で入って言った古い書庫の中で神を賛美していたのである。¹⁴

聖霊に導かれ、跪いて祈る母の祈りに神様は答えられ、テイラーの魂に聖霊が働かれ、彼はキリストを受け入れて、賛美するように導かれていたのである。また、テイラーのために祈っていたもう一人の家族がいたことが伝記には記されている。

それからしばらくして私は私の手帳とそっくりな一冊の手帳を拾ったので、全く自分のだと思い込んで開いてみた。するとその小さな日記のはじめのところに、次の言葉が書いてあるのが目に留まった。「お兄さんが救われるまで、私はお兄さんのために毎日お祈りする決心をした。」一ヶ月ののち、兄は本当に救われた。そのような家庭に生まれ育って、そのような環境のもとで救われた私は、神の約束は絶対に信頼できるものであり、祈りは、まことに、神と心を通わせる方法であると、強く感じたのである。¹⁵

¹⁴ 同上書、10.11 頁

¹⁵ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、1956 年、37 頁

テイラーの妹が、彼の救いのために毎日祈っていたのである。このようにテイラーは、父の一枚の伝道トラクトを通して、聖霊に導かれた母と妹の祈りによって、キリストを救い主として受け入れたのであった。兄妹愛し合い、祈り合う家庭はなんと美しいのだろうか。テイラーの背後にあった家族の祈りに倣い、将来家庭を築く時は子供のために祈り、兄弟姉妹のためにも祈る者でありたいと願う。

第3節 どのように中国宣教の志を与えられたのか

祈りの中で生まれ、神様の恵みを受けつつ成長していったテイラーは、何がきっかけで中国宣教への思いを抱くようになったのだろうか。テイラーが中国宣教の思いを与えられ、彼が大きな影響を受けたのは、中国人の魂の救いへの重荷を持つ父の存在であった。テイラーの伝記には、父の中国への情熱がこのように記されている。

父は、しばしば、友人たちに向かって、海外への伝道、わけても中国への宣教について語っていた。それが明らかに必要であるのに、教会が無関心でいたので、そのことが一つの重荷として父の心を苦しめていた。中国四億人の住民のことを思うと、父は、必ずしも福音説教者としてではなしに、いつも、こう叫ぶのだった。「なぜ宣教師を中国に派遣しないのですか。中国こそ、わたしたちの目的とすべき国です。あそこには、住民が満ち溢れている。強くて知的で、学問のある人たちがいるのです。」父からそういう言葉を聞いたときには、ハドソンは胸の内できずき、宣教師として中国へ行こうと決心するのであった。そののち、人々がピーター・パーレーの著書「中国」を読んで、興味をそそられると、中国へ行こうというハドソンの決意もいよいよ強まっていった。¹⁶

テイラーの中国への志は、父の言葉を通して、強められていった。また彼が、中国宣教を志すようになった決定的な出来事は、テイラーが、キリストを救い主として受け入れてから、彼はキリストにある勝利の生活を歩むことができずに思い悩んでいたことから始まった。そして、テイラーは妹のアメリアに手紙を書き、ぜひ自分のために祈ってほしい、と頼んだ。¹⁷その晩、彼は神様に渴くと同時に、自分の弱さを感じていた。彼は、以下の御言葉に言及している。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたに近づいてくださいます。¹⁸」、

¹⁶ 同上書、27頁

¹⁷ 同上書、44頁参照

¹⁸ ヤコブ4:8

「私はキリストと共に十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。¹⁹」

彼はもはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きているのです、というみことばを生き、キリストにある勝利の生活、主と全く一つになることを求めて、祈ったのであった。彼は次のように記している。

「あの頃のわたしに臨んでいた気持ちは、決して、忘れられない。あの気持ちは言葉では言い表せない。神の御前に臨んで、わたしは全能の神と聖約を結んでいるように思われた。前途の見込みなどは引っ込めても良いときえ感じた。しかしそれはできなかった。というのは、何ものかがわたしに向かって、『君の祈りは答えられた。君の条件は受け入れられたのだ』と言っているように思えたからである。この時から、わたしは中国へ呼ばれているのだという確信をもった。そしてその確信はわたしから離れなかった。」彼ははっきりと、「さあ、わたしのために中国へ行け」という神の命令を聞いたかのように感じた。彼はすぐに、彼の生涯の意義が中国にあることを認識した。（中略）彼の母はこう書いている。「あの時から、彼の心は決まったのです。彼の勉強も研究もみなこの目的をもって行われていたようです。どんなにひどい困難に出会っても、彼の目的が揺らぐことはありませんでした²⁰。」

テイラーは葛藤し、悩み、妹にとりなしの祈りをしてもらい、キリストを生きることを祈り求めたのであった。その祈りの中で、神から中国へ呼ばれているという確信を抱き、生涯の召しを受け取ったのである。中国宣教への思いが固まると、彼は医師になる勉強を始めた。

²¹テイラーは1854年、21歳の時に²²中国に渡り宣教師となり、伝道旅行などを通して福音を伝え、現地の中国人の文化に適した服装を着て生活した。²³テイラーの祈りの中で収穫の働き人が神から送られ、チャイナ・イングランド・ミッションという宣教団体が設立された。この宣教団体を通して1000人以上²⁴の宣教師が、福音の伝えられていない中国全土へ派遣され、福音宣教が拡大していったのである。テイラーは1905年に73歳²⁵で召天した。

¹⁹ ガラテヤ 2:19.20

²⁰ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、46、47 頁

²¹ 胡宣明編著、『載徳生—ハドソン・テイラーの伝記』69 頁参照

²² 同上書、132 頁参照

²³ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、161 頁参照

²⁴ ハワード・テイラー、『ハドソン・テイラーの生涯とその秘訣』、256 頁参照

²⁵ ハドソン・テイラー、前掲書、172 頁参照

第2章 聖霊の働き

この章では、テイラーの生活の中で具体的に、どのような聖霊の働きがあったのかを考察する。テイラーの生涯を学ぶ中で見られる聖霊の働きは3つのパターンに分類することが可能である。それは、第1に、みことばを通しての聖霊様の導き、第2に、祈りの中で与えられる志と聖霊様の導き、第3に、状況を通しての聖霊様の導きである。この章では、この3つの聖霊様の導きを表す出来事を通して、聖霊様の働きを紹介する。

第1節 みことばからの聖霊様の働き

テイラーの生涯を研究する中で、特に多く記されていたのが、みことばからの聖霊の導きであった。聖霊は、みことばを通して働かれることが、以下の箇所に記載されている。

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。²⁶

聖霊は、助け主であり、すべてのことを教え、みことばを思い起こさせる事がこの箇所に記されているが、テイラーの生涯の中でも、聖霊はみことばを思い起こさせて、働かれていた。また、聖霊はみことばを宣言する事を通して働かれることを以下の箇所からも読み取ることができる。

「神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの例を注ぐ。(中略)しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われるのです。」(中略)「彼の言葉を受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた。」²⁷

この箇所では、ペテロに聖霊が臨まれ、大胆に語った時の出来事であるが、聖霊がみことばであるヨエルの預言をペテロに思い起こさせ、ペテロはそのみことばを語っている。さらに、そのみことばを語ると、聖霊が働き、3千人の人が救われたのであった。このように、聖霊は、みことばを思い起こさせ、みことばを大胆に語らせ、キリストの証人として大胆に用いられるのである。そのような大胆な聖霊の働きの根底にあるのは、変わる事のない神

²⁶ ヨハネの福音書 14:26

²⁷ 使徒の働き 2:17,21,41

の言葉であった。神の言葉は真実であり、神の言葉を語るなら、神はその言葉通り行われる。この、神の言葉を思い起こさせるのが聖霊であり、聖霊のみことばによる働きかけが、テイラーの人生にも顕著にみられた。また、そのみことばに従うテイラーに、聖霊は力強く働かれたのである。

(1) 求める者には与えよ

テイラーがみことばに従っていった中で特徴的だった事は、お金に関する取り扱いについてであった。彼は、宣教に必要な資金を誰かの援助を求める事なく、神様に祈り求め、神様から与えられる供給に従って歩んでいた。彼はこのように述べている。

はるばる中国に渡り、人々の援助から遠く離れたところで、ただ生ける神だけに頼り、保護と生活の必要、またあらゆる助けを得ようとする事は、私にとって本当に重大な問題であった。私はこのような計画に対して、霊的な力も強くしておく必要があると思った。信仰さえあれば神は決して見捨てられない。しかし信仰そのものがはっきりしていなかったらどうであろう。それで私にとっては「神が真実か否かではない。果たして目の前の目的に向かって前進しても良いと保証するに足りるだけの強い信仰が、自分にはあるかないか」が実に重要な問題であった。「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自分を否むことができないからである」という事を当時はまだ知らなかったからである。そのためにひそかに「私は中国に行くために、誰にも何も求めない。ただ神に向かって求める。それなら、出発前の今のうちから、ただ祈りによって人を動かすことがとても大切である」と考えていた²⁸。

テイラーは、このような強固な信仰を抱いて、経済的な必要の全てを神様に頼るという事を実践したのである。テイラーは働いていたが、給料日が来るとハドソンの方からお金を受け取る申し出をするように、と言われていた、しかし彼は神様が祈りを通して雇主の方から給料を与えてくださるようという事を祈りながら試し始めた。この事により神が祈りを聞くという励ましを受けるためであった。しかし給料日になっても、給料は振り込まれるようすがなく、様々な支払いを終えて、銀貨半クラウン（2シリング6ペンス）を残すだけの時があった。その日、礼拝に出た後に、みすばらしい男がハドソンの元に来て、瀕死の状態にあ

²⁸ ハドソン・テイラー、いのちのことば社出版部訳『信仰の生涯を語る』いのちのことば社、1991年、21.22頁

る妻のために祈って欲しいと言われた。テイラーはなぜ神父さん²⁹を呼ばないのかと尋ねたが、彼は神父さんは18ペンス出さなきゃダメだと言われ、一家が餓死しそうな時に、そんな金はないという事をテイラーに話した。その時テイラーは、その日の夕飯と朝食もあるが次の日の昼食は何もないことが心に浮かんだ。そのみすばらしい男と彼の妻である、ボロボロの布団で貧弱しきった母親が、生まれて1日半しか経っていない赤ん坊を抱いて寝ており子供はうめき、弱り果てていた状況であった。テイラーはこの状況の中でこのように書き記している。

その気の毒な父親は私に向かって言った。「あなたは私たちが実際にどんな恐ろしい状況にあるかお分かりです。助けていただけるとしたら、どうかお助けください。」ちょうどその時「求めるものには与えよ」の一言が私の心に浮かんできた。王の言葉には権威がある。私はポケットに手を突っ込み、そろそろとあの半クラウンを出して男に渡した。そして「私がもっと豊かな生活をしているなら、こんなことは大したことではないかもしれません。しかしこれまでお話ししてきたことは決して間違えではありません。神はまことの父であり、信頼できる方です」と言った。全ての喜びが洪水のようになって私の心に戻ってきた。³⁰

彼は、明日の昼食の食事が無いところまで追い詰められたが、聖霊様を通して与えられたみことばに従い、行動した時に喜びが心に与えられた。

翌日の朝食にはまだかゆがあった。それが食べ終わらないうちに、郵便配達戸口を叩く音が聞こえた。…封筒を開いてみると中に手紙はなく、一組の皮の手袋が一枚の白紙に包まれていた。驚きながらそれを開いた時、半ポンド金貨が下に落ちた。「神よ、感謝します」と私は叫んだ³¹。

²⁹ テイラーの伝記によると、みすばらしい男は話し方からアイルランド人だとわかったので、神父を呼ばないのかと尋ねたことが記されている。(ハドソン・テイラー、前掲書、23頁) 2016年アイルランド国勢調査によると、アイルランド人の約78%がカトリック教徒とされている。アイルランド人の多くはカトリック教徒であるため、牧師ではなく神父と尋ねたと推測できる。ただし当時のカトリック教徒パーセンテージは不明。外務省「アイルランド基礎データ」『外務省』外務省、
<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ireland/data.html>> 2020.1.13

³⁰ ハドソン・テイラー、前掲書、26頁

³¹ 同上書、27頁

テイラーの捧げたお金は、12時間で利率が400パーセントとなって帰ってきた。「与えよ」という神のみ言葉を通して、聖霊は働かれた。

(2) 十分の1を携えて

さらに彼の経済管理から学ぶことは、徹底した十分の一献金と、借金をしないということであった。得たお金、手に入ったお金はどんなお金でも十分の一を捧げた。これは、

十分の一をことごとく、宝物蔵に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。一万軍の主は言われる「わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。³²

というみことばの実践である。

(3) 借りがあってはなりません

テイラーはみことばに従い、借金をしないという生き方を貫いた。そのため、中国伝道協会から辞退したのである。彼は次のように述べている。

わたしはこれまで常に、借金を避けてきたし、どんな事情のものでも収入を超えるような出費は許さなかった。けれども中国福音伝道協会はしばしば借金で俸給を支払ってきた。これについてはわたしは幾度となく、繰り返して抗議を送ってきた。けれども彼らの借金政策には何の改善も行われなかった。それゆえ、わたしは良心的な動機から辞任せざるを得なかった。神の御言葉の教えは誤りなく明らかであるように思われた。ロマ書13章8節に『何人にも借りがあってはならない』とある。キリスト者にとっては、金を借りるのは聖書の教えに反するものとわたしは考えた。金を借りることのあるキリスト者たちは、神が彼らに善きものを与えるのを差し控えたからであると告白し、神が与えなかったものを手に入れるために、自己に依り頼む決心をしたのだと述べている。…聖書は明らかに、借金にかかわりあってはならぬとわたしに教えた。神が貧しいとか、彼が資源に乏しいとか、真に神のものである仕事に必要なならば、神がそれを補充するのを欲しないとは、わたしにはどうしても考えられなかった。神のための仕事において資金の不足が起これば、それは、この仕事の特別な発展やその時期が神の御意志にそ

³² マラキ 3:10

わないものを示すものであるとわたしには思われた。それゆえ、わたしの良心を満足させるために、わたしは協会から辞任せざるを得なかった。³³

なんと神様のみことばに真摯に向き合う姿勢だろうか。筆者はこのハドソン・テイラーの生き方を読む中で、彼のように純粹にみことばに従い歩みたい！と切に思わされる。このようにみことばに忠実に従った彼に、神様は大きな真実さを持って、経済的な祝福を持って恵みを注がれるのである。

第2節 祈りの中で与えられる志と聖霊様の導き

聖霊様がハドソン・テイラーに働かれた導きは、全部で3つのパターンがあり、それは第1に、みことばによる導き、第2に祈りの中での導き、第3に状況を通しての導きである。テイラーの生涯を考察する中で、特に顕著に見られた聖霊の働きが、この節で紹介する祈りの中で与えられる志しと導きであった。聖霊は、祈りの中で志と導きを与える事が次のみことばに記されている。

彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい」と言われた。そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。³⁴

この箇所、祈りの中で聖霊は志を与え語られ、導かれることを読み取ることができる。1章の中で触れたように、テイラーは祈りの中で神様に生涯の全てを捧げる決心が与えられた。また彼は、(後述するが)祈りの中で愛する恋人を置いてでも、神様に語られていると信じる中国宣教の道へ進む事を導かれた。テイラーの働きの根幹を占めていたのは、祈りであり、祈りによって、宣教の働きは進められていた。祈ることによって、経済的な必要が与えられ、祈ることによって、働き人が与えられ、祈ることによって救われる魂が起こされていったのであった。次のみことばは、イエスの名によって求めるものはなんでも与えられるという祈りの力を約束している。

あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、ま

³³ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、214、215頁

³⁴ 使徒の働き 13:2,3

た、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。³⁵

テイラーの生涯を見るとときに多くの実が彼を通して実り、その実が残っているのを見ることが出来る。これはまさに、このヨハネの福音書のみことばを実証している。イエス様が私たちを選ばれたのは、私たちが行って実を結び、その実が残るようになるためであり、私たちがイエスの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためである。ハドソン・テイラーはまさに、イエスの名によって父なる神に祈り求めて歩み、経済面において、働き人の面において、福音宣教拡大の面において、全ての面において神に実を求めたのであった。彼の祈りの中で、テイラーは志を与えられ、聖霊の導きと力を受けて、前進していったのである。主を待ち望み、祈る者はどのように生きる事ができるが以下の箇所に記されている。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることが出来る。走っても力衰えず、歩いても疲れない。³⁶」テイラーはいつも、主を待ち望み、新しい力を受けて、神の働きを行なっていた。

(1) 全ての造られた者に

テイラーの伝記には彼の志が、次のように記されている。

わたしたちの主は、この世を去って天国へ帰られる少し前、弟子たちに向かって「全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよ」（マルコによる福音書16:15）と命じられた。「すべての造られたもの」というのは、すべての人という意味である。ある日テイラーがこの句の意味を吟味していると、突然新しい解釈が胸に浮かんできた。主ははっきりと述べておられる。「全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよ」。（中略）中国の民衆の一人一人に福音を説くことは、当然なされなければならない³⁷。

テイラーが心に抱いていたのは、イエスキリストの、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよという、大宣教命令であった。そして、その命令を実行に移すため、当時中国の3億人のすべての人々に福音を伝えることに焦点を絞り、彼らに福音を伝える収穫の働き人が与えられることを祈り求めて、宣教を進めていったのである。

³⁵ ヨハネの福音書 15:16

³⁶ イザヤ 40:31

³⁷ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、409、410 頁

(2) 未開の地

イエス様が弟子たちを派遣される場所は、現代においてはどこであろうか。それは、「キリストの名がまだ語られていない場所³⁸」である。そして、中国は当時キリストの名が伝えられていない地であった。その地へ行き、イエス様が二人ずつ遣わされたように、このイエス様スタイルの宣教方法に倣うよう祈り求めたことが、自伝に記されている。

私は主に二十四人の同労者を求めた。つまり伝道者のいない内陸の十一の諸省にそれぞれ二人ずつと、モンゴルに二人の宣教師である。私はこの願いを聖書の欄外に書き記した。³⁹

テイラーは、未開の地、まだキリストの名が語られていないところに福音を伝える事を求めて、働き人を送ってくださるよう具体的な人数も定めて祈り求めたのであった。

(3) 働き人を祈る

ルカの福音書ではイエス様が弟子たちにこのように祈るよう教えている。

その後、主は別に72人を指名して、ご自分が行くつもりのすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。そして彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。⁴⁰

イエス様は72人を指名し、2人ずつご自分の行くつもりの全ての町や場所に、2人ずつ遣わされた。テイラーは祈りの中で、みことばに基づいて働き人が与えられるように求めたのであった。テイラーは働き人を得る方法について次のように述べている。

私は神のことばを学ぶことによって、どのようにしてしっかりと働き人を得られるかがわかった。第一に、神に働き人を遣わしてくださいと熱心に祈ること、第二に、教会の霊的ないのちを国内にとどめることができないうらいに熱く燃やすこと。私はまず方法や賃金を考えることなく「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい

³⁸ ローマ書 15:20

³⁹ ハドソン・テイラー、前掲書、157頁

⁴⁰ ルカの福音書 10:1.2

い。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」と言われた主のことばに信頼して働きを進めるのが使徒のやり方であったことを知った。⁴¹

テイラーが祈りの中で求めたのは、神のみことばを実行することであり、聖書に記された神の御心が実現することを祈り求めた。そのために神の国とその義をまず第1に求め、収穫の働き人を求めて祈ったのである。

第3節 状況を通しての聖霊様の導き

テイラーの生涯を考察する中で、彼が多くの困難や葛藤を通りながらも、神様の御心を第1に祈り求めて人生を選択してきた事を読み取ることが出来た。聖霊は、みことばと祈りの中でテイラーに働かれたが、様々な状況を通して働かれた。状況を通して働かれた聖霊の導きを使徒の働きの次の箇所で見ることができる。

その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアへ渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。パウロがこの幻をみたとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。⁴²

聖霊はパウロに幻を見せるという状況を通して、語り、導かれた。それでは、テイラーに神はどのような状況を通しての聖霊の働きかけがあり、それにテイラーはどのように答えていったのだろうか。この節では状況を通しての聖霊の導きについて述べる。

(1) 恋人との別れ

テイラーの生涯を考察する中で、特に心に残った状況における聖霊の働きかけは、テイラーの恋愛についての出来事であった。聖霊は、付き合っていた彼女の志とテイラーの志が異なるという状況を通して働かれたことが次のように記されている。

この美人で美しい声をもっている若い音楽教師は、その友に海外宣教の計画をやめさせることは全く不可能であると知って、ついに自分には中国へ行く用意のない事をはっきりさせたのであった⁴³。

⁴¹ ハドソン・テイラー、前掲書、154頁

⁴² 使徒の働き 16:9,10

⁴³ ハワード・テイラー、舟喜信訳『ハドソン・テイラーの生涯とその秘訣』、いのちのことば社、1964

テイラーの彼女は、テイラーの中国宣教への志とは違う思いを抱いていた。そのため、テイラーに海外宣教の計画をやめさせることは不可能であるという事を知り、彼女自身に中国に行く用意がない事をはっきり伝えたのである。このように聖霊は、彼女の志とテイラー自身の志が一致しているかどうかという状況を通して、別れるという道へ導かれるように働きかけられたのである。

(2) 病院を委ねられる

また、聖霊は危機的な状況を通して、テイラーに働きかけられた。テイラーは、中国でパーカー博士の協力者として病院を運営していたが、パーカー博士の妻が亡くなり、彼は4人の子供達を母国であるスコットランドに返すため、病院を離れなければならなくなったのである。このような状況の中で、聖霊はテイラーに対して、パーカー博士を通して、どのように働かれたかが次の文章に記されている。

博士は、以前の協力者であったハドソン・テイラーが診療を続けてくれることができるのではないかと考えた。そこで彼らに予期していなかった勧誘がなされたのである。⁴⁴

パーカー博士は、病院をテイラーに任せ、続けて病院を運営することができると考え、病院を運営するという勧誘がなされたのである。聖霊は、このような危機的な状況を通してテイラーに働きかけられたのである。

小結 2章のまとめ

第2章では、テイラーの生涯にどのような聖霊に働きかけがあったのかを考察した。テイラーの生涯には、様々な聖霊の働きがあったが、主にみことば、祈り、状況を通して、聖霊はテイラーに働かれた。このような聖霊の働きかけに対して、テイラーはどのように応答していったのであろうか。第3章では、聖霊の働きかけにテイラーがどう応答したのか、またその応答に対して、聖霊はどのように働かれたのかを詳しく見ていく。

年、24頁

⁴⁴ ハワード・テイラー、前掲書、98、99頁

3章 聖霊の働きかけにどう応答したのか。どのように働かれたのか

2章で考察したように、テイラーの生涯には様々な聖霊の働きかけがあった。3章では、彼はどのように様々な聖霊の働きかけに応答していったのだろうか、彼の応答に、聖霊はどのように働かれたのだろうか。この2つの視点から、テイラーがどのように聖霊の働きかけに応答し、それに対して聖霊はどのように働かれたのかを考察する。まず第1節では、みことばへの応答と聖霊の働き、第2節で、祈りの中で与えられる志に対する応答と聖霊の働き、第3節で、状況を通しての働きへの応答と聖霊の働きについて考察する。

1節 みことばへの応答と聖霊の働き

(1) 従順と聖霊の満たし

テイラーの生涯の中で顕著であった聖霊の働きの中でも、根幹を占めているのは彼の、みことばへの従順であった。みことばに従順に従う時に、彼は聖霊で満たされ、神様に用いられていったのである。テイラーはみことばへの従順の重要性について次のように述べている。

もしもわたしたちが身を捧げて、主の命令に十分に従おうとするならば、イエスの弟子たちが五旬節において経験したのと同じように、聖霊に満たされる。神は聖霊を限りなく賜うからである。その御手にかかれれば、貧しさも最大の富へ変えられるのである。わたしたちはただひたすらに従おう。そして理屈をこねるのはやめよう。主は決して誤りをおかさない。主は決して変わらないであろう。⁴⁵

ここでテイラーは主の命令であるみことばに十分に従おうとする時に、聖霊で満たされると語っている。テイラーの伝記には次のように記されている。

「ご自分に従う者たち」(使徒5:32)に聖霊をお与えになるのです。服従の行為として、私たちがこの国のすべての地方、すべての町、すべての村の人々が福音を聞けるように、それも速やかに聞けるようにと決意し、ただちに実行することを決意するならば、御霊が力を現してくださり、必要なものがどこからか次々に湧き出してくると、私は信じま

⁴⁵ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、412頁

す。その炎は、宣教師から信じる者の群れへと広がり、中国人の同労者と神の教会全体が祝福されるでしょう。神はご自分の従う者たちに聖霊をお与えになります。⁴⁶

彼は、神に従うことによって、聖霊が力を表してくださる事を宣言している。

(2) お金を借りない選択と経済の祝福

テイラーがみことばによる聖霊の導きに従い、どのように聖霊が働かれたのかという具体的な例の中で、特に代表的な事は、経済的な問題に関してのみことばへの従順であった。経済的な問題に関して、「だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。⁴⁷」というみことばから、お金を借りている中国伝道協会からテイラーが辞退した事を第二章で取り上げた。彼がこのみことばに従っていった結果、どのように聖霊は働かれたのであろうか。次の記録は、経済的な問題に対して、みことばに忠実に生きる者に対して、神様が真実に報いてくださる事を証している。

1600ポンドのお金がわたしたちの前進運動のために送られてきました。わたしたちが進む場合には、神はいつもわたしたちを榮えさせてくださいます。⁴⁸

神のみことばから、お金を借りないという事を教えられ、そのみことばに信頼して実践するテイラーに対して、神様は経済的な祝福を持って臨んでくださった。この出来事にとどまらず、経済的な面において、テイラーは神様から大いなる祝福を受けていた事を、息子のハワード・テイラーはこのように記している。

テイラーが指導し、祈りによって支えていたころのミッションの収入は、ただ神に求めるだけであったが、四百万ドルに達していた。1900年以降の収入合計は、2千万ドルにもなる。これもまた、神のみに求めて与えられたものである。今までも負債はなかったし、今も負債はない。⁴⁹

⁴⁶ ロジャー・スティーア著『ハドソン・テイラー、キリストに生きた人』栗原督枝訳、いのちのことば社、2000年、394、395頁

⁴⁷ ローマ書13章8節

⁴⁸ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、421頁

⁴⁹ ハワード・テイラー、前掲書、256頁

テイラーが指導し、祈っていた頃に、ミッションの収入は400万ドルに達しており、1900年以降の収入には2000万ドルというお金が送られてきていたのである。聖霊様から導かれたみことばを守り、忠実に歩む者に注がれる神の祝福は測り知れない。

(3) 全ての造られた者に宣べ伝える

テイラーは「すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」というみことばに従順に歩むことに関して、テイラーは次のように述べている。

従えば喜びが得られる時とか、従うことによって利益が得られる場合には、わたしたちは、ほとんど少しも主に従わないのである。「もしも彼が一切の主でないならば、彼は全く主ではないのである。」中途半端な状態はないのである。中国の民衆の一人一人に福音を説くことは、当然なされなければならない。(中略) 過去において、ウイリアム・バーンズと一緒に旅行して、彼らは、しばしば、1日に5百名から千名の人々に福音を説いたのである。⁵⁰

テイラーは、「全世界に出て行き、全ての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」と命じられたイエス様のみことばに従順に従おうと務め、チームで1日に1000名の人々に福音を語る機会を持つこともあった。さらに彼は、中国の民衆一人一人に福音を説くことが必然である事を語っている。この、大宣教命令に従うテイラーに対して、聖霊はどのように働かれたのだろうか。テイラーの息子のハワード・テイラーは次のように記している。

今日、三千ないし四千の中国の働き人が、C・I・M(チャイナ・イングランド・ミッション)と関係を持ち、1900年以降の受洗者だけでも十万に及んでいる。⁵¹

みことばに従順に歩んだテイラーに神様は大きな祝福を持って答え、働かれ、十万人もの人々が洗礼を受ける程に大きく彼を用いられたのであった。

⁵⁰ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、410頁

⁵¹ ハワード・テイラー、前掲書、256頁

第2節 祈りの中で与えられる志に対する応答と聖霊の働き

第2節では、祈りの中で与えられる志に対する応答と聖霊の働きについて述べる。聖霊はテイラーの生涯に祈りの中で働きかけられた事が顕著であった。また、与えられた志を祈り求める中で、神は真実にテイラーに答えてくださった。テイラーは祈りの中でどのように、聖霊様の導きに対して応答していったのであろうか。

収穫の働き人を求め、1000人の働き人が送られる

テイラーは「収穫の主は、働き人が与えられるように求めなさい。」という聖霊様によるみことばからの導きに祈りをもって従うことによって応答した。彼が、収穫の働き人を祈り求めた結果、どうなったのであろうか。以下、テイラーの自伝から年表のかたちで簡単にまとめる。

1872年 (40歳) …まだ開かれていない九省に二名づつ、計十八名の宣教師が与えられるように祈り始める。

1874年 (42歳) …未開拓の九省のために祈りを会員に訴える。中国のプロテスタント伝道はすでに70年になるのに、各教派からの派遣宣教師は全部合わせてもまだ37人にすぎなかった。

1875年9月 (43歳) 祈りの答えとして与えられた18人とともに出発。

1876年9月3日。条約が結ばれて今まで堅く閉ざされていた中国奥地の門戸が完全に開かれる。先頭切って乗り込んだのは、神が備えてくださったチャイナ・イングランド・ミッションの宣教師達であった。その後はしばらく続く者達のない有様であったが、各地で続々伝道が開始された。この後ミッションの宣教師による伝道の行程は、十八ヶ月で十二万キロに達した。ミッション本部はウーチャンに前進。

1887年2月。…二人の若い女性とともに、タイユワンに孤児院を開設。

1881年(49歳) 十一月のウーチャンにおける大会でさらに72人の働き手を5年以内に求める祈りがささげられ始める。

1887年。一年以内に少なくとも百人の新しい働き人を求める祈りが始まる。

1887年12月。百人の宣教師とその派遣に必要な費用とが祈りの答えとして満たされて終る。実は求めた数の六倍の献身者があったが、ちょうど百人しか受け入れられなかった。

1890年。五年以内に千人の宣教師が与えられるように祈り始める。

1895年4月。上海の大会では、千五十三人の新しい宣教師が受け入れられたことが報告された。

1895年夏。暴動、反乱が起こり、他の伝道会では殉教者を出すようになった。

1900年。テイラー、オーストラリア、ニュージーランドを経てアメリカに渡る。このころまでにチャイナ・イングランド・ミッションの働きはすでに国際的なものとなった。ヨーロッパ諸国、アメリカ、カナダ、オーストラリアから伝道団が続々参加。…この年、義和団の乱が始まり、全土に大虐殺が始まる。チャイナ・イングランド・ミッションだけでも五十八人、他に二十一人の子供の犠牲者を出した。⁵²

テイラーは40歳の時、まだ福音が宣べ伝えられていない 9省に2名ずつ、計18名の宣教師が与えられるように祈り始め、43歳の時に、祈りの答えとして与えられた18人とともに出発した。49歳の時に、72人の働き手を5年以内に求める祈りがささげ始め、55歳の時には、1年以内に少なくとも100人の新しい働き人を求める祈りが始まった。神様はその祈りに答え、その年に百人の宣教師とその派遣に必要な費用とが与えられ、求めた数の6倍の献身者があった。58歳の時に5年以内に1000人の宣教師が与えられるように祈り始め、5年後の63歳の時に1053人の新しい宣教師が与えられたのである。テイラーが以下のみことばに従うことによって、聖霊は働かれたのである。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。⁵³」神が御心に叶う願いをするなら聞き、叶えてくださることが以下のみことばに約束されている。

何事でも神のみこころに従って願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神の願い求めたことをすでに手にしていると分かります。⁵⁴

テイラーが収穫の働き人が送られるように祈り始めて23年後に1053人の働き人が送られた。神様は収穫の働き人を送ってくださるよう祈りなさいという、みことばによって示された神様の御心にかなう願いに、彼らの祈り求めた信仰に応じて、働き人を送られた。このように聖霊はテイラーの祈りに答え、中国全土に福音が宣べ伝えられていったのである。

⁵² ハドソン・テイラー、前掲書、169-172 頁

⁵³ ルカ 10:2

⁵⁴ 第一ヨハネ 5:14.15

3節 状況を通しての働きかけにどのように応答し、答えられたのか

(1) 祈り委ねる

テイラーは、愛する彼女との関係において、彼女のうちに中国への志がないことを知った。その事実に対して、彼はどのように応答したのだろうか。聖霊の導きは、時に自分の願いと相異なる場合がある。神の願いが自分の願いと異なることを悟った時、テイラーはどのように聖霊の働きかけに応答していったのだろうか。彼女のうちに、中国への志がないことを知ってから、どのような応答をしたかが、次の文章に記されている。

わたしは、この上もなくみじめであったが、結局、集会へ出かけて行きました。しかしあまり歩かないうちに、讚美歌の一つが心の中に浮かんできました。つづいて祈りが起こってきたのでわたしは感謝しました。わたしは涙の流れるのを止めることができませんでした。(中略) 神の愛が霧に閉ざされた魂を融いでくれたので、わたしはこれまでの恩知らずの行為についてお赦しをこうため、真剣になって祈りました。(中略) 主は、わたしの試練における当惑の気持ちを取り除いてくださらないとしても、こう歌わせてくださいます。『しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救いの神によって喜ぶ。』ハバクク3:18 こうしてわたしは主の恩寵によって楽しみ、いつまでも楽しみ続けるでしょう。主がわたしに呼吸を与えてくださるので、わたしは主をたたえます。今では、わたしは救い主の愛によって幸福になりました。わたしはすでに過ぎ去った全てについて主に感謝し、来るべき全てについて、恐れなく、主を信頼することができます⁵⁵。』

上記の文章では、テイラーが苦しみの中にありながら、神を求めて集会に出かけて行く様子が記されている。彼は集会に向かう途中で、祈りと悔い改めに導かれ、神を賛美する思いへと変わっていった。神の願いと自分の願いが異なる時に、神の元に行き、祈る事で自分の思いが、神の思いへと造り変えられて行くことを上記の文章から読み取ることができる。

ハドソン・テイラーは愛する彼女を諦めてしまって、キリストを勝ち取った。パウロも年老いてからこう書いている。「わたしは、…わたしの主キリスト・イエスを
知る知識の絶大な価値のゆえに、一切のものを損と思っている。キリストのゆえ

⁵⁵ 胡宣明編、前掲書、79、80頁

に、わたしはすべてを失ったが、それらのものをふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためである。⁵⁶」(ピリピ人への手紙3:8)

テイラーは祈りの中で、キリストに勝るものはない事を知り、愛する彼女と共に国内で生きる道ではなく、神様が召してくださっていると信じる中国宣教の道へ、彼女を手放し進んで行ったのであった。このことから、テイラーは、自分の大切にしているものを捨てても、神様のあわれみのゆえに祈り求め、神様の御心、ご計画を第1にして人生を選択していった事を知ることができる。テイラーは自分を捨てて、自分の十字架を負い、キリストに従う選択を選んでいった。この選択をするために、神に祈り委ねるといふ応答を選んだのであった。以下のみことばは、神の御心にそった歩みをする秘訣について述べている。

この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良い事で、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。⁵⁷

テイラーは祈りによって、神に自分の思いを変えていただき、神の御心を選択していったのであった。

(2) 十字架を負って従う時に与えられた主の恵み

聖霊は状況を通して彼の人生に働かれた。2章で取り上げたが、テイラーに病院が委ねられる状況が与えられ、その状況において彼は病院を引き受けた。こらはまさに、「互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。⁵⁸」というみことばを実行している姿である。このような病院を引き受ける出来事について、彼の伝記には次のように記されている。

けれども、神が祝福しているこの仕事には、それ相応の犠牲がかかっていた。「十字架をもたないものは何も持っていない」これが霊的な原則である。ハドソン・テイラーが払った代価は健康を害するという犠牲であった。彼はほとんど生命を失うまでになった。⁵⁹

⁵⁶ 同上書、80、81頁

⁵⁷ ローマ12:2

⁵⁸ ガラテヤ6:2

⁵⁹ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、242頁

テイラーは、病院の代表者であり医者であるパーカー博士が家族のために母国へ帰り、病院を残していくという事態に直面し、テイラーは病院を引き受けた。そして、その仕事をもたらした代価はテイラーの健康の悪化であった。そのような代価を彼は払ったが、神はテイラーとその病院を祝福し、用いられた。聖霊はテイラーにどのように働かれたのだろうか。伝記にはどのように神様が働かれたのかが記されている。

九ヶ月の間に十六人の患者がすでにバプテスマを受け、三十名以上のものが、志願者として登録されて、寧波の教会のうちのどれか一つに入る許可を与えられるようになった。その年も終わりに近づく前に、六百名以上の外来患者が治療を受け、入院患者60名がみな福音を聞いた。(中略) このときテイラーはこう書いた。「まことに、神はわたしたちと共にあり、わたしたちを限りなく祝福している」。

聖霊様は状況を通して働かれる。また、その状況にあったみことばを適用し、人々に仕え、十字架を負ってイエス様に従う者には、神様の格別な祝福が注がれるのである。テイラーは回想して言う。

主に導きを求めてから、必要を満たす方法を備えられ、祈りを聞きたもう神のご忠実さにのみたよって、診療だけでなく病院の世話も引き受けるようにと迫られているのを感じた。⁶⁰

テイラーはこの時、病院の経済的な面においても実際的に世話をするようにと、状況を通して聖霊様から導かれた。そしてこのような危機的な状況に対して、彼は次のように述べている。

外来者の診療はもちろん、入院患者の費用も無料であったので、毎日の出費は相当なものであった。その時までは、博士が外人を診療して得た基金でこれらすべての経費が賄われていたが、博士の出発とともに収入源は全くなくなってしまった。しかし、主イエスのみ名によって求めることはなんでもなされると、神は言われたではないか。それに

⁶⁰ ハワード・テイラー、前掲書、99頁

私達は、方法ではなくて神の国そのものをまず求めなさい、そうすればこれらのものはすべてが私達に加えられると聞いている。まさに十分な約束ではないか。⁶¹

テイラーは、神様のみことばを聞き、そのみことばが真理であるゆえに、恐れることなく、経済的に危機的な状況に神様のみことばを宣言して歩いていったのである。病院はその日の必要を満たすだけの資金しかなく、その後はただ祈りによるしかない実情が分かった時に、パーカー博士の残していった働き人たちが辞職していった。しかし、同時に新しい働き人が送られてきたのである。

ある者はできるだけ時間を捧げた。ある者は必要は備えられたが別に賃金の約束もなしに全時間を捧げて働いた。みんなが病院とその問題のために、心を用いて祈った。

(中略) 患者たちの間に一とにかく初めは家庭的な雰囲気と、熱心な扱い方に対する喜びがあふれていた。⁶²

新たな危機的な状況に置かれても、神の国とその義とをまず第1に求めるテイラーの祈りに神様は答え、多くの働き人を送られ、その場所で伝道も始められた。

彼らは病人には親切で慎重であったが、そればかりでなく、時間があるとすぐ、彼らのいのちを造り変え、安息を求めて来る者を誰でも受けうる方^{ママ}について話していた。本もあり、絵もあり、歌もあり、すべてが賛美を奏しているようだった。礼拝堂での毎日の集会は、次の集会をいよいよ待望させるようなものであった。⁶³

そして、その病院で福音が分かち合われ、神様の賛美が溢れていったのである。病院の経済的な状況を知った患者たちは、結果がどうなるか熱心に見守っていた。

パーカー氏が残した金はなくなり、ハドソン・テイラー自身の供給するものも心細くなってきた。次に何が起こるのだろうか想像をめぐらす人々も多かった。そのころ彼は、ある時は一人で、またある時はわずかの助力者たちとともにあって、熱心にせつに祈り

⁶¹ 同上書、99頁

⁶² ハワード・テイラー、前掲書、101頁

⁶³ 同上書、101頁

求めていた。(中略) 病院が持ちこたえるかどうか、ということばかりではなく、そこには少なからぬ数の人々の信仰がかかっていた。⁶⁴

ある朝、ついにコックがハドソンの元に来て、最後の米袋も開いてしまい、どんどん減っていること言った。それに対してハドソン・テイラーは、

「それではいよいよ主の助けてくださる時が近づいているのに違いありません」と答えるのだった。実際、その通りであった。その米袋が空になってしまう前に、若い宣教師は一通の手紙を受け取った。(中略) その手紙の中には、以前と同じように50ポンドの小切手が同封してあった。⁶⁵

さらに、その手紙には、手紙を書いたバーガー氏が、神のために用いるべき富の重荷を感じており、もっと多くのお金を、有効に用いる道があれば、事情をよく知らせてくれるようにというものであった。この神様のみわざに対する感謝会の喜びの叫びと歌を、患者たちは聞き、

「あれほどのことができる神がどこにいるだろうか。」、「わたしたちの悩みの時に神々が救ってくれたり、こんな具合に祈りに答えてくれたことがあるだろうか」。これが彼らが心に抱いたり、口に出したりしたことであった。⁶⁶

聖霊様はパーカー博士が病院からいなくなり、経済的な危機、働き人の危機、という状況を通して、ハドソン・テイラーを危機的な状況に置かされた。しかし、その状況の中でも、これは聖霊様の導きだと信じ、みことばに信頼して、祈り続ける中で、神様は働き人を送り、経済的な必要を満たし、福音を伝える機会を与え、多くの人が神様のみわざを体験する機会として益として、用いてくださったのであった。神を愛する者のために、神はどんな状況でも働かせて益とされる事を次のみことばは約束している。

神を愛する人たち、すなわち、神のご計画に従って召された人たちのためには、すべてのものが働いて益となることを、私たちは知っています。⁶⁷

⁶⁴ 同上書、101、102 頁

⁶⁵ 同上書、102 頁

⁶⁶ 同上書、103 頁

⁶⁷ ローマ 8:28

(3) 中国服を着て仕える

テイラーは日常生活の小さな聖霊様の導きに従う中で、日々の人生を歩んでいった。その中で特に特徴的なのが、中国服を着ての伝道であった。彼は、中国の人に近づくために、中国の服装を真似して中国人に近づいて行ったのである。彼は、自分の国のあり方を捨てて、相手の文化に合わせ、近づいていくことにより歓迎されて行った。関わる人々の文化や背景に合わせて仕えるなら、その人々から信頼を勝ち得て歓迎されるというのは素晴らしい知恵ではないだろうか。聖書の中に次のような言葉がある。「すべての人に、すべてのものとなりました⁶⁸。」この生き方はパウロが実践していたことであるが、イエス様ご自身も自分のあり方を捨てて、人々に仕えるためにこの世にこられた。パウロも、自分のあり方ではなく、関わる人々に応じて接していた。そして、テイラーも、関わる中国人に合わせて接して行っていたのである。テイラーは中国服を着て、中国人に福音を伝えた時の喜びを、妹に手紙の中で次のように記している。

「世界の罪を償うために死なれた主のことについて、わたし達が話せるように、中国の一家の者がみな集まった有様を見るのは、とても興味がありました。わたしのすぐそばには十歳くらいの女の子が腰掛けました。(中略) その隣にその兄がいました。(中略) その次にバーンズ氏が腰掛け、その向こう側に二十歳になる青年が席に着いた。男の大人達はテーブルの周りに腰掛けていたが、母と先輩の娘二人と、もう一人の女は後方にひかえていて、半分しか姿が見えなかった。わたしが幼い頃、回心する前に、母や妹が祈ってくれた話をしているうちに、みなが身を乗り出して集まってきたのにわたしは気がつきませんでした。おお、神よ、遠からず中国にキリスト者たる母や妹達をお与えくださいますように！船へ戻ってわたしは、喜びと感謝の涙を禁じえませんでした。もしもわたしたちが中国服を着なかったならば、おそらくこのように民衆へ近^{ママ}づけなかったでしょう。⁶⁹

テイラーは中国服を持って中国の民衆に近づき、証を語った喜びをこのように述べていた。聖霊はあらゆる状況を通して、導きを与えられる。その小さな導きやアイデアに聖霊の助けを受けつつ、実行していくことが大切である。

⁶⁸ 第一コリント 9:22

⁶⁹ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、176 頁

小結 3章のまとめ

2章では聖霊がどのようにテイラーの生涯に働きかけたのを見、3章では、聖霊の働きかけに対してテイラーはどのように応答していったのかを考察した。テイラーの聖霊の働きかけに対する応答を考察する中で、一貫して共通していることがあった。それは、みことばへの従順である。テイラーは、みことばに従い、祈りや状況を通して働かれる聖霊の導きに対して敏感に、日々の生活の中にみことばを適用した。そのテイラーの応答に対して、聖霊は真実に働かれたのであった。聖霊の働きかけとそれに応答するテイラー、さらにそこに働かれる聖霊。そこにあったのは、聖霊とテイラーの豊かな交わりであった。以上のことから、テイラーの生活の中で顕著であったのは、絶えざる聖霊との交流であったと言えるだろう。この交わりを土台として、彼の人生には2つの大きな特色が見受けられた。それは、第1に、神の恵みに依り頼む内なる側面と、第2に、明確なビジョンという働きの姿勢としての外への側面であった。次の章では、彼の人生で見られた内と外への2つの特色について詳しく見ていく。

第4章 神様に用いられる秘訣

テイラーの生涯を2,3章と考察する中で、見えてきた決定的な特徴は、内なる側面と外なる側面の2つの生き方の姿勢であると説明することが可能である。それは、第1に内なる側面としては、神の恵みに依り頼んでいた。第2に働きの外なる側面としては、明確なビジョンがあった。4章では、テイラーがどのように神の恵みにより頼み、どのようなビジョンを持っていたのかというこの2つの特徴を詳しく説明し、神様に用いられる秘訣をテイラーの生涯の考察から明らかにする。

第1節 神の恵みに依り頼む

(1) 祈りによる徹底的な神への信頼

テイラーの生き方を考察する中で内なる側面として見えてきた特徴は、神の恵みにより頼んでいたということであった。そして、それは徹底的な神への信頼による祈りから生み出されたものであった。テイラーは次のように述べている。

かくして神は、中国上陸に先立ち、私を励まし給う所があった。すなわち私はあらゆる要求を彼の聖所に持ち出すべきである。そして神が主イエスの御名に栄光をあらしめようと

し、あらゆる危険に際して必要な援助を与え給うであろうことをしかと期待すべきである⁷⁰。

テイラーは全ての要求を祈りの聖所の中で、神にイエスの御名によって求め、期待した。それは経済的な必要においても同様であった。テイラーの伝記には、次のように記されている。

テイラーが絶対に背かなかつたもう一つの天の^{マツ}顕示は、信仰を祈りに答えて仕事を成し遂げるのに必要な資金を補充することについては全的に神に依り頼まなければならないという一事であった。⁷¹

テイラーは資金を補充する事においても、全面的に神に依り頼む信仰を握っていた。また、経済的に神に信頼する事において、彼は兄弟に宛てた手紙に残している。

「わたし宛に送って下さるべき資金が集まらないので、あなたが困惑しておられるとは、まことに申し訳ありません。『何事も思いわずらうな』と申されているではありませんか。私たちは、神がお送り下さるものをできるだけむだなく使うよう心がけるべきです。けれどもそれがなされていけば、たとえ真の欠乏らしく見えることがあっても、そんなことには、決して思い煩らう必要がありません。わたしが幾年にもわたって神の誠実さに依って生きてきた経験から申しますと、欠乏の時こそ、まことに、特別に深い祝福のある時であり、或いはそういう祝福へ進んでいける時であると私は証言することができます。どうか、祈りによって神へ訴える以外は、資金集めの訴えなどは絶対にやらないようにして下さい。わたしたちの仕事が物乞いの仕事になってしまったら、それこそ、もうお終いです。神は誠実であられます。真実であるに違いありません。『主はわたしの牧者であつて、わたしには乏しいことがない』（詩篇 23:1）。主は申されました。『何を食べようか、何を飲もうかと自分の生命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分の体のことで思いわずらうな。・・・まず神の国とその義とを求めなさい。そうすればこれらのものはすべて添えて与えられるであろう。』（マタイによる福音書 6:25.33）『見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる』（サムエル記上 15:22）愛する兄弟よ、疑うことや信じないことは、主を誘いまどわそうとすることです。⁷²」

⁷⁰ ハドソン・テイラー『回想』1955年、81.82頁

⁷¹ 胡宣明編著『載徳生 ハドソン・テイラーの伝記』聖書図書発行会、1956年、362頁

⁷² 胡宣明編著、同上書、362、363頁

テイラーは資金が集まらない兄弟に対して、心配することがないように、欠乏の時こそ、特別に深い祝福のある時であり、或いはそういう祝福に進んでいける時であると述べ、神に信頼し続けることを励ましている。また、祈りによって神に訴えること以外の資金集めの訴えを絶対にすることがないようにと伝え、「主は私の羊飼いです。私は乏しいことはありません。⁷³」というみことばに信頼する事を励ましている。

(2) とりなしのリクエスト

テイラーの生き方の特徴を見る中で、特に顕著であったのは、神の恵みに依り頼む、という事であった。テイラーは自分の力で神様に従うことはできないことを悟っていたので、自分で祈ると同時に、多くの人々に神様に従うことができるようにと、お祈りをお願いしていたのである。テイラーは母への手紙の中で次のように記している。

わたしはいまあらゆる種類の困難に直面しています。もしもわたしたちに仰ぎ見るべき神がいまし給わなかったならば、わたしは本当に震えてしまったでしょう。現在のような状態でさえ、わたしは圧迫されていると感じないわけにはいきません。『主よ、わたしたちの信仰を増して下さい』（ルカによる福音書 17:5）どうか、わたしのために熱心に祈ってください。わたし以上に価値のない者はまたとないでしょう。わたしにはこの仕事を正しく成し遂げることは全く不可能だと感じています。ヤコブの能力ある神がわたしの助言者になって下さいますように。わたしの進むべき方向がどうなるか、わたしには全く見当がつかないのです。北へ行くのか、南へ行くのか、西へか、東へか、わからないのです。わたしは、こんなにも全的に神に身を委ねていると感じたことはありません。でも、やがては、神は私たちを導いてくださるでしょう。⁷⁴

テイラーは、困難にあい、圧迫を感じている時に、熱心に祈って下さいと懇願している。どこへ行くのかわからず、どのように仕事を成し遂げるかわからない中で、彼が求めたのは神の恵みであり、それは他の人へのとりなしの祈りのリクエストとして通して現れていた。また、別の両親への手紙ではこのように記している。

⁷³ 詩篇 23:1

⁷⁴ 胡宣明編著、前掲書、354 頁

わたしはしばしばあなた方に向かって、祈りにおいてわたしを記憶して下さるよう、お願いしてきました。わたしは本当にそれを必要としています。(中略) これまでにも増して、ご両親さまのお祈りをわたしは必要としているのです。わたしの責任はますます重くなっていきます。それゆえ、この責任をやり遂げるようわたしを援助して下さる特別な恩寵をますます必要としています。(中略) どうかわたしのために祈って下さい。わたしが罪へ陥らないよう、わたしをすっかりきよめて下さるよう、ますます神のお仕事にわたしをお使い下さるよう、神にお祈り下さい。⁷⁵

テイラーは神の恵みがなくては、任せられた神の働きを全うすることはできないことを理解し、神の恵みによって、神の働きができるように、熱心に祈りの援助を求めたのであった。また、テイラーはある信者に宛てて、次のような手紙を送っている。

神がわたしたちを導いて、どちらの方向へ、どんな風に伝道すべきかを教えて下さるよう、どうか、毎日、わたしたちのためにお祈りして下さい。わたしたちには全能の神がいっしょについております。全知の相談役としてわたしたちを案内して下さいます。内にひそむ聖霊として、説かれたみことばに効力を与えて下さいます。(中略) 多くの友達から毎日祈ってもらえるように努めて下さい。(中略) どんなふうに誰によってそれが行われるべきかは、わたしたちは神におたずねしなければなりません。⁷⁶

テイラーは、どの地域で、どのように伝道するのか毎日祈って欲しいと祈りをお願いしている。これは、聖霊様の導きに対して敏感に歩んでいたテイラーらしい祈りであると同時に、御霊によって歩む大切さを覚えさせられる。彼はまた、多くの友達から毎日祈ってもらえるようにと祈りを願って求めているのである。テイラーは、徹底的に細部にまで祈り、神様の御心を求めて、神様の恵みによって、神様の働きを行うことを求めて歩んでいたのであった。

(3) 神の真実さ

テイラーは祈りによる徹底的な神への信頼と、多くの人からのとりなしの祈りによって、神の恵みにより頼み歩んでいた。しかし、彼が用いられた秘訣の最も重要な事は、彼がどれだけ祈ったか、彼がどれだけ祈りのお願いをしたかではなく、祈りに応えられる、神の真実さにかかっていた。ハドソンテイラーは自伝の中で次のように述べている。「私どもが信じようが信じまいが、

⁷⁵ 聖書図書刊行会編集部『ハドソン・テイラー（載徳生）の伝記』クリスチャン・ウィットネス・プレス、證道出版社、1956年、306-308頁

⁷⁶ 胡宣明編著、前掲書、359,360頁

彼は全く真実である。⁷⁷」

テイラーは私たちが信じようが信じまいが神は真実な方であると述べている。もしテイラーが神を信じなかったなら、神の真実さを体験する事は出来なかっただろう。しかし、神を信じたゆえに彼は、神の真実さを体験したのであった。テイラーは神の恵みにより頼み、祈った。そして神は、真実にその祈りに応えられたのである。また、第二テモテへの手紙には次のように記されている。「私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。⁷⁸」この箇所では、パウロがテモテに対して、私たちが真実でなくても、神は真実な方であることを伝えて励ましているが、テイラーが語っている事と同じであり、私たちがどうであっても、神は真実な方である、という真理であった。テイラーはまた、次ように述べる。

ハガール女史の「人もし彼を全く信頼せば 彼の全く真実なるを知らん」ということを単に知るだけではない、事実その通りを経験する人は如何に幸福であろう、しかも我々が彼を完全に信頼し得なかった時すら、彼は変わることなく真実にまします。⁷⁹

全く神に信頼し、神の全き真実さをしる幸せを味わう人として歩む事はどれほど素晴らしいのだろうか。テイラーは神の真実さを、このように告白している。

如何に恵み深く彼が私を導き続け、また備え給うたか、私はとうてい語る事ができない。(中略) 私の信仰は試みられずにいなかった。しばしば実にしばしば私は残念ながら、はずかしいながら、かくも真実なる父を信ずる信頼において失敗した。ああ、しかし私は彼を学びつつあったのである。⁸⁰

テイラーでさえ、信仰の試みにおいて神を信頼することができない時が何度もあった。それにもかかわらず、神は恵み深く彼を導き、備えを与えたのであった。私たちが神に信頼できないときでさえ、神は真実で恵み深いお方なのである。

⁷⁷ ハドソン・テイラー、前掲書、169頁

⁷⁸ 第二テモテ 2:13

⁷⁹ ハドソン・テイラー、前掲書、169頁

⁸⁰ 同上、168,169頁

第2節 明確なビジョン

テイラーの生涯の中で特徴的だったことは内においては、神の恵みに依り頼むことであり、外側に現れる働きにおいては、明確なビジョンを持って働きを進めていたことにある。テイラーがいつも握りしめ、働きをするにあたって大切にしていたビジョンとは、第一に、すべての造られたものに福音を宣べ伝える事。第二に、キリストの名が伝えられていない地に宣べ伝える事。第三に、収穫の働き人を求める事、という3つの要素に分類することができる。これは、みことばに啓示された神の御心であり、そのみことばを実現することを彼は求めて、祈り、実践する事を追い求めて生涯を全うしたのであった。

(1) 全ての造られた者に

テイラーの働きの根元にあったものは明確なビジョンであり、そのビジョンはみことばに基づいた神の御心であった。テイラーの伝記には、彼が抱いていたビジョンについて、次のように記されている。

わたしたちの主は、この世を去って天国へ帰られる少し前、弟子たちに向かって「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」（マルコによる福音書 16:15）と命じられた。「すべての造られた者」というのは、すべての人という意味である。（中略）中国の民衆の一人一人に福音を説くことは、当然なされなければならない。⁸¹

テイラーは、すべての造られた者に福音を伝えるというイエス様からの命令を受け止め、そのために中国の一人一人に福音を説く事は当然なされなければならないと考えていた。またテイラーは、イエス様の「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」という大宣教命令を実現するために、次のような祈りをしていたことが記されている。

彼は、それまで8年間、神の前に祈ってきたことと、この事を結びつけて考えた。世界中のクリスチャンが、中国にいるすべての造られた者にイエスの良きおとずれを伝える働きを支援することである。⁸²

⁸¹ 聖書図書刊行会編集部、前掲書、409,410頁

⁸² ロジャー・スティーア著、栗原督枝訳『ハドソン・テイラー、キリストに生きた人』いのちのことば社、2000年、428頁

テイラーは、世界中のクリスチャンが中国にいるすべての造られた者に福音を伝える事を支援するようにと神に祈っており、彼の求めているのは、「すべての人に福音を伝える」という父なる神の御心であった。

(2) キリストの名がまだ伝えられていない地

また、テイラーはすべての造られた者に福音を伝えるにあたって、戦略的な宣教方法をとっていた。その宣教方法とは、使徒パウロが追い求めていた事であり、キリストの名がまだ伝えられていない、未伝道地域に行き福音を伝える事であった。神がテイラーにキリストの名がまだ伝えられていない地に福音を伝える事を示されたことについて、このように記されている。

その日神はハドソン・テイラーに、「まだキリストの名が口にされたことのない国」に、「神の恩寵を聞いたことのない人たち」に、しかも奥地へ深く入って、それを知らせるように、福音を説くべきだと示したのであった。⁸³

神はテイラーに、キリストの名が口にされたことのない国、奥地へ入り、福音を伝える事を示された。キリストの名が語られていない場所について、使徒パウロは次のように述べている。

キリストの名がまだ語られていない場所に福音を宣べ伝えることを、私は切に求めているのです。こう書かれていますとおりです。「彼のことを告げられていなかった人々が見るようになり、聞いたことがなかった人々が悟るようになる。」⁸⁴

使徒パウロはキリストの名がまだ語られていない場所、キリストの事を告げられておらず、聞いたことがない人々に福音を宣べ伝える事を切に求めていた。これは、テイラーも使徒パウロと同じくして握っていたビジョンであり、「すべての造られた者」に福音を宣べ伝える事を願われる神の御心であった。

(3) 働き手を祈る

神はすべての造られた人に福音を宣べ伝える事を望まれ、キリストの名がまだ語られて

⁸³ 聖書図書刊行会編集部、146.147 頁

⁸⁴ ローマ人への手紙 15:20.21

いない地に福音を宣べ伝える事を求めておられる。そしてそのみことばを握り、テイラーは働きを進めて行ったのであった。では、具体的にどのようにして、テイラーはまだキリストの名が伝えられていない所に福音を宣べ伝えたのであろうか。テイラーの宣教方法はルカの福音書 10 章に記されている、イエス様が弟子たちに教えられた宣教方法ととてもよく似ている。イエス様は弟子たちに、次のように祈るようにと教えている。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。⁸⁵」イエス様が教えられた、「働き人を送ってくださるように祈りなさい」、という祈りに基づいて、テイラーは収穫の働き人が中国へ送られてくる事を祈り求めた。テイラーがどのようにこの祈りを実行したかが伝記には記されている。

彼は「祈りの訴え」と題する文章を発表した。これには、「千五百万以上の中国人のために」という副題がついていた。その一節に、「われわれの現下の緊急必要事は道を示すべき宣教師がもっとたくさん欲しい事である。同じ志のキリスト者諸君よ、あなた方は今、神への情熱を込めて、1 分間だけでよいから、熱心にこうお祈りしてくださいませんか。神よ、今年のうち、十八名の適任者でよいから、この仕事へ身を捧げるように仕立て上げてください、と。⁸⁶

テイラーは、中国のすべての造られた者に福音を宣べ伝えるため、収穫の働き人が与えられるように、具体的な数字をあげて祈り、祈りのリクエストを送っていたのである。神は、テイラーの祈りに応え、18 名の働き人が中国へ送られた⁸⁷。テイラーの生き方の特徴として働きの中で外に現れていたのは、明確なビジョンであり、それは「すべての造られた者に福音を伝える」というイエス様の命令であった。また、そのイエス様の命令を実行に移すために、中国の地へターゲットを絞り、収穫のために働き人が与えられるようにと祈り求めて行ったのである。

小結 4章のまとめ

テイラーが用いられた秘訣はなんだったのか。第 2,3 章で聖霊の働きとそれに対するテイラーの応答、また、その応答に働かれる聖霊のみわざを考察する中で、様々な聖霊の導きに対して、みことばに徹底的に従順に従うテイラーの生き方が浮かび上がってきた。ま

⁸⁵ ルカ 10:2

⁸⁶ 胡宣明編著、前掲書、1956 年、366 頁

⁸⁷ 同上、367 頁

た、テイラーの生き方から、2つの特徴が見えてきた。それは、内と外に現れるものであり、この章で取り上げたものである。それは、第1に、神の恵みにより頼み、祈りによる神への信頼ととりなしの祈りによって、神の真実により頼み働きを進めたこと。第2に、みことばに基づいた「すべての造られた者に福音を宣べ伝える」というビジョンを握って、イエス様の教えられた収穫の働き人を送ってくださるようという祈りによって送られた働き人を、キリストの名がまだ伝えられていない未伝地へ遣わしていたことである。以上のことから、テイラーは、徹底的に神様のみことばに基づいて神の御心がこの地で実現するように祈り、行動していたことが明らかである。「神のことばは、生きていて力があり⁸⁸、」と聖書には記されているとおりに、神の言葉に生きる人生は力強い。また、「ことばは神であった⁸⁹。」とヨハネは宣言しているが、神のみことばは、イエス・キリストご自身である。道であり、真理であり、命であるイエス・キリストは、みことばを通してご自身を聖書によって啓示された。そして、そのみことばによって、神が働かれたことをテイラーの生涯を通して読み取ることができる。テイラーは神のみことばが実現する事を願い求め、そのために人生の全てをかけたのであった。ヨハネの手紙にはこのように記されている。

何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。⁹⁰

テイラーは神のみこころにしたがって願い求め、その祈りを神は聞かれた。そして、神に願い求めた事を手にしていったのである。

⁸⁸ ヘブル 4:12

⁸⁹ ヨハネの福音書 1:1

⁹⁰ 第一ヨハネの手紙 5:14,15

結論

テイラーがなぜこれほどまでに用いられたのか。その答えは、「神の言葉に生きた」からであった。テイラーは神のことばに信頼し、その言葉を実践するために、あらゆる事を犠牲にした。愛する彼女を優先するよりも、聖霊の導かれる中国宣教の道を選択し、「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。⁹¹」というみことばを守るために、宣教団体を辞任した。また、神の恵みにより福音を伝えることができるという事を心に留めて、多くの人々に祈りを求めたのであった。神に期待して徹底的に祈り求め、神に信頼し、委ねつつ歩んだ。そして、聖霊様の導きを受けて伝道できるように祈り求め、主の示される方法で福音を伝える事を絶えず追い求めていた。また彼は、絶えざる聖霊との豊かな交わりの中でみことばによって生かされていたのである。「すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい⁹²。」というみことばに裏付けられた、「中国の全ての人に福音を伝える」という明確なビジョンと、「働き手を送ってくださるよう祈りなさい。⁹³」と教えられたイエス様の祈り方に忠実に従い、「二人ずつ遣わされた⁹⁴」というイエス様の宣教方法に倣って、中国全土に福音を伝える事を求め、信仰のレースを走り抜けたのであった。

⁹¹ ローマ 13:8

⁹² マルコの福音書 16:15

⁹³ ルカの福音書 10:2

⁹⁴ ルカの福音書 10:1

参考文献

- (1) ハワード・テイラー著『ハドソン・テイラーの生涯と秘訣』舟喜信訳、いのちのことば社、1964年
- (2) ロジャー・スティーア著『ハドソン・テイラー、キリストに生きた人』栗原督枝訳、いのちのことば社、2000年
- (3) ハドソン・テイラー著『ハドソン・テイラー、信仰の生涯を語る』いのちのことば社、1991年
- (4) 胡宣明編『ハドソン・テイラーの伝記』ジャパン・コンサイアバティブ・バプテスト・ミッション、1956年
- (5) 聖書図書刊行会編集部『ハドソン・テイラーの伝記』聖書図書刊行会、證道出版社、1956年
- (6) 新改訳聖書 2017
- (7) ハドソン・テイラー、岡藤訳『回想』三一書店、1955年
- (8) 八木哲郎著『19世紀の聖人ハドソン・テイラーとその時代』キリスト新聞社、2015年
- (9) グスター・コル『支那西教史考』房書堂山向、1926年
- (10) 『はじめての中国キリスト教史』、かんよう出版、2016年

引用サイト

- (1) 遠藤周作監修、佐藤陽二編「世界のキリスト教会の現状」三省堂 キリスト教ハンドブック改訂版、〈https://www.sanseido-publ.co.jp/publ/jesus_hdb_2/html/chapter_five_2.html〉 2020.1.2
- (2) 外務省「アイルランド基礎データ」『外務省』外務省、〈<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ireland/data.html>〉 2020.1.13

本文字数 34185 語